

便利さに 未来も捨てて 使い捨て

植

田

劭 (使い捨て時代を考える会)

「はじめ」まがいのこと

京都で、私たちが使い捨て時代を考える会をはじめて、三年近くの年月が経った。古紙回収からはじまった活動も、現在では安全農産品を素材に、現代農業にまで関心の領域を拡げてきた。

そのことについて、編集部から書けという注文を受けて、少々困惑した。というのも私のアナキズムに関する知識はほとんど皆無に近く、その理解度にいたっては全く話にもならない。そのことは本誌の読者の関心がどの辺にあるのかも良く知らぬということである。「敵を知り、己を知れば百戦あやふからず」というのが有名な兵法にあったと思うが、本稿を引き受けるなど、兵法外れも度をこしている。このようなために、「現にやっていること、考えていることをそのまま書けばよい」とすすめられ、知らぬほど強いことはないかと納得して、ペンをとることにした。期待外れの向きには予め、おわびしておきたい。

「油断」は大敵

最近、堺屋太一著の「油断」という小説まがいを読んだ。これ

は近々映画化されると聞く。「小説まがい」というのは小説の形態をとって、高級エリート官僚が「無智な国民」にエネルギー危機の深刻さを説得し、「地域エゴの住民運動」と「売名をこととする野党と公害学者」への批判を主たる目的として書かれた意図的文書だからである。この小説の執筆の背景は同書あとがきにくわしいが、石油危機の現実性についての調査研究を通産省を中心に行ってきたことにあるようだ。その研究の最終段階で例の石油危機が発生したので、小説形式で書くことにしたものらしい。

ストーリーは単純である。中東に大紛争が発生し、国際化する。その結果、アラブの石油が入ってこなくなる。わずかばかりの備蓄石油はあつという間に底をつく。自動車は動かなくなる。火事に対する消防活動も思うにまかせぬ。電力は不足する。北日本各地で凍死者がでる。食糧運搬も思うにまかせず、各地で深刻な食糧不足が発生し、大都会の地下街などには行き倒れの餓死者も続出する。…ストーリーは単純であるが、事実認識のある一面では極めて現実的である。石油の大量消費の上に浮ぶ文明は、石油の枯渇とともに沈む。この必然の前で、エリート官僚が危機感にとらわれるのも無理はない。ふんぶんたるエリート感覚で、その危

機感を描いたのが「油断」なのである。

この小説の背景となった調査研究と関係があったのだろうか、その最終時期に相当する四八年の九月に、当時の田中首相は訪欧の旅に出る。その訪欧を前にNHK総合テレビにおける特別一時間番組「首相と語る」を思い出す。田中角栄は、この訪欧がエネルギー問題をめぐって、ヨーロッパの先進国と調整の話し合いを主な目的とすることをかくさず、拡大成長を維持発展させるためには、一層エネルギーが必要だと説き「五、六年先には、アメリカなみに、一年に一人が一ワリットル使うようになる」と語った。さらに、火力発電所・原子力発電所の建設に反対する住民運動を地域エゴと批判し、「原子力には公害はない。危険では太陽の出すものの百分の一だよ」「電力は産業用じゃない。民生用なんだ」といったいいかげんな嘘を並べた上に、「発電所反対を主張するのなら、電気冷蔵庫も、テレビも使えなくなる。不便な昔に逆戻りだ。それでもよいのか」といった内容で、国民を恫喝した。角栄と「油断」には共通したところがある。国民はおどかせば黙るとみくびったところである。

消費型資源に依存する「大原庄助」

恫喝に屈するわけにはいかない。しかし、彼らも馬鹿ではない。恫喝が有効でなければしいはずである。恫喝を有効にしている背景は何であらうか。第一に、その恫喝には、ある種の根拠すなわち物質的な理由のあることであり、第二には、相手が恫喝に屈する程度に弱い状態にあることである。

第一の点からはじめよう。我々は「豊かで便利な」生活を楽し

んでいる。それは地下埋蔵資源の大量消費の上に可能なのである。このような資源は一度消費すれば補充が効かない。使ってしまったば、おしまいである。石油にしても銅鉱石にしてもそうである。このような消費型資源に依存する文明を「大原庄助」型の文明と呼ぶことにしている。歌の文句ではないが「笹に小金の成り下る」ほどの資産も、それを補充することなく消費し、「朝寝朝酒朝湯が大好きで」となれば、「身上つぶした」と続くのは、「もっともだア、もっともだ」となるのである。

ローマ・クラブ・レポートを引用するまでもなく、石油は二、三十年で枯渇するといわれている。枯渇するのは石油だけではない。銅鉱石もやはり、二、三十年である。その他多くの地下埋蔵資源もその程度でなくなると予測されている。確認埋蔵量は探査探鉱技術の進歩によって、まだまだ増えるだろうとの楽観論もある。しかし、そうだとすると、その期間を三倍に延ばすことはむづかしい。所詮は五十歩百歩の話である。

石油がなければ、原子力があるといった感しくも犯罪的な議論を仮りに承認したとしても、原子力発電所からの電力を有効に利用しうるための銅はドウなるのだろうか。銅が枯渇したとき、一体どうして電化製品を動かすことができるのだろうか。まして、放射能公害は無視しない。

たかだか数十年で、「豊かな」文明は確実に崩壊する。もちろん、この議論は大量生産・大量消費の上に成立する工業化社会の継続を前提としている点で不完全である。また、拡大成長によって肥大し続けた巨大企業の犯罪性や南北問題をそのままにした議論である点で疑問はある。しかし、現状を疑わず続けていけば、

そうなるだろうという点ではたしかなのである。

消耗型資源に依拠する文明は確実に沈む泥船なのである。この泥船におとずれる危機への予感が、角束の恫喝や小説「油断」の背景なのである。そして、一方では、この拡大する物質の消費が公害を拡大し、環境を破壊しているのである。「大原庄助」は必ず没落する。

豊かさ、便利さの生み出す孤立

おどかさ、馬鹿にされている一般国民はどうだろうか。「消費者は王様だ」とおだてられ、大量消費にもとづく使い捨て文明に、どっぷりつかり込んで、巨大企業と商業資本を喜ばせてきた。テレビその他で流れてくるコマーシャルにあやつられ、次々と新製品を求め、便利になった、豊かになったと浮かれてきた。生活の内実の貧しさを忘れようとするかのように、自家用車を求め、 unnecessary ガソリンを消耗する。狭い部屋に「ふさわしい」大型テレビをすえ、音響効果を度外視したところにすばらしく、かつ高価なステレオを置く。

生活が質素で「貧しかった」時代には生活の智慧は大切であったが、スイッチ一つで用の足せる時代となつては、何もかも忘れてしまうことができる。全てがインスタント化してしまった。かつてなら、生活の智慧は世代から世代へと引きつがれ、老人は老人として尊ばれるだけの理由があった。しかし、現代では新製品の前でおろおろする老人は「役立たず」と見なされ、「ババ抜き」が「理想」の一つに上げられるようになっていく。

生活の智慧を失い、ガソリンと電気がなければ、何ともならない

い生き方を「豊かだ便利だ」と錯覚する。このような状況下での「豊かさ便利さ」は一人一人を狭い個室のような自動車に押し込み、テレビの前で一人映像をたのしむ孤立した個人を生む。助け合い励まし合って生きる道をも断ってしまう。孤立した個人となることは、自立した人間となることは全く異なる。孤立した人間は、流行に流され、社会的関心を失い、自己中心的にふるまうだろう。二年余り前に怪談した一連のパニックは、このことを露呈した。このような状況だから、角束の恫喝も有効性をもつのである。

生活の中から、自立した市民を

拡大成長にもなつて、公害・環境汚染は深刻化した。生活の安全は失われ、人類生存の基盤も崩壊してきた。当然のことながら、各地で反公害闘争は展開される。しかし、ある限界を突破できずにもどかしい状況がつづいている。私には、この限界は孤立した自己中心の個人の普遍化と深いかわりを持っているように思えてならない。

私の住む家の近くに自動車道が造られようとしたとき、「公害道路反対」の運動がおこった。しかし、運動の成果かどうかは知らないが、路線変更になった。しかし、そのとたんに、立看板すら消えてしまった。変更先で反対運動がおこっていても連帯は全く生まれてこない。そして、かつて運動の中心であった人達の中には、今も必要とも思えぬ自家用車を走らせている人もいる。このような様子を見ると、「反公害闘争は地域エゴだ」と、体制側の攻撃につけ入るすきを与えていると感じて、残念に思うの

である。こうして、直接の火の粉をかぶってこない限り、対岸の火事として関心を持つとはしない一般国民の海の中で、公害現地闘争は孤立の運命を嘆くことになる。戦闘的党派や評論家諸氏の難解な言説も、自己中心的発想の中で、束の間の「幸せ」に酔う一般国民に影響を与えることはできない。多数の国民にとって、他人事と思えぬ事態が、今以上に進んでしまつては、手遅れとなるだろう。そして、資源の枯渇も進み、体制も一層ヒステリックになるだろう。そして、その行方がファシズムであるとすれば大変である。私は断固、ファシズムを拒否したい。

拒否するためには、一般国民の生活者のレベルの中で、自分も周囲も共に考える運動を自立的に形成するしかない。自分らの生活のあり方が、それ自体としては体制を支え、人類生存の基盤を破壊しているという事実を直視しなければならない。きびしい自己省察の上に、生活の中の具体的問題を取り上げ、そのことを通じて、自立した市民を広く深い市民生活の中から生み出さねばならない。

クズ紙も 丸めてしまえば ただのゴミ……

私たちの始めた「考える会」の活動の紹介のために書き出した前文が長くなってしまった。予定の紙数に近づいたので、申し訳けないが、かけ足で進ませていただく。

私たちの会は、古紙回収からその活動をはじめた。すでに述べたように「豊かで便利な生活」を疑わずに続けるところに、現代のかかえる問題の重要な一面を見たわけである。そのことを私は「便利さに 未来も捨てる 使い捨て」という標語にあらわして

みたのである。現代生活において、最も安易に捨てられているものの一つが紙である。紙の消費量は文明のパロメーターとして、大量に使われている。そして、紙クズは、価値のないものの象徴として扱われているほどである。しかし、紙を作るのに大量の木が森や山で切り倒される。美しい緑をはぎとり、ヘドロの海を作り出すのが紙である。そうだとすれば、紙クズを問題として、そこから生活を問ひなおし時代を考えることができるはずである。「子供らに きれいな地球 残しましょう 古紙集めて 緑を守る」というわけである。以来回収は、細々とではあるが続けている。私も毎月最低二回は回ることになっている。

こうして始めた古紙回収の中で一番おもしろいのは、回収業者の決して持って行かないクズ紙である。「クズ紙も 丸めてしまえば タダのゴミ 集めて活かそう 再び紙に」というわけである。一軒一軒の家庭で、クズ紙も丸めず保存し、回収する。この目立たぬ小さな行為の積み重ねが何物かを一人一人の内面に生み出すだろうと信ずるのはロマンティズムと笑われるかもしれない。しかし、クズ紙を集めて、丁寧にヒモをかけて、出してくれる家庭が増えると、うれしくなるのである。

安全な食品から生活を問う

豊かさで便利さに酔い痴れているうちに、足元から崩れはじめている例を上げるとは、それほどむづかしい。その中でも食べ物のことはとりわけ深刻である。この問題は、生活に密着したことにだけに、私たちの会の「考える素材」としては恰好である。私たちの健康はおびやかされている。厚生省発表でも、最近十

数年間に先天性奇形は五倍に急増している。この原因としては、医薬公害と食品汚染とが大きな部分を占めている。農産品には残留農薬が、加工食品には有害添加物が、というわけである。問題は質だけではない。量的にも危機が迫っている。食糧の約半分を海外にたよっている現状には形容する言葉もない。

このような背景の下で、私たちの会は「安全農産品」をとり上げた。市販の鶏卵は、合理化のすすんだケージ養鶏によって、安価に出回っている。その陰で、鶏糞↓農地↓作物↓：といった循環を大切にし、農業の一部に組み込まれた山岸式農業養鶏は姿を消していった。京都近郊にもほとんど全く見られない。わずかに残った農業養鶏とのつながりを見直すことから始めることにした。

最近、有機農業が叫ばれる。農村から、牛馬や鶏がいなくなつた現状では、お題目に終わってしまうおそれもある。その意味では、平飼養鶏と農業とを一体化する農業養鶏は有効であると考えている。その鶏糞を田畑に入れ、地力を回復維持することによって、農業を使わないか、使うとしても、最小限の使用で、安全な農産品の生産の可能性を拡げることができるだろうと期待している。化学肥料の多用と農薬の多用とは不可分なのである。安全な農産品が失われた理由・原因を問わずに、また、それをあらためる努力もせず、安全なものを欲しいと主張することは、虫がよすぎるといふよりも、エゴイズムに墮することとなるだろう。安全な農産品という「結果」を得るためには、それを失った原因にまでさかのぼらねばならない。私たちの生活は、お金さえ払えば、何でもすぐに、手に入ると思い込む工業と商業の論理の上に成り立

っている。しかし、農産品はそうはいかない。収穫までには、畦を作り、種をまくことから始まるのですらない。その土地の地力を作るのに何年という歳月をかけるのである。これは現代のインスタント性とは、まさに対極にあるものである。

私たちが町で流行を追ひ、華美な生活を求めて生きるとき、誰が農村で泥と汗にまみれて働くだろうか。工業生産性との競合を強いられるとき、農業は化学肥料・農業・機械化と合理化をすすめて、単作専業へと向かわざるをえなくなった。こうして、現金経済に組み込まれ、自給体制が破壊され、農民は兼業化から離農へと追い込まれていくのである。昨春の中高卒の九二万人のうち、農業をえらんだものが、わずかに一万人という深刻な数字と私たちの生き方が無関係とは言えない。

現在、平飼の養鶏による卵を中心に、その養鶏農家会員の農産品を、消費者会員に供給している。その供給活動を担うべく、会員の持ち寄り出資による法人・安全農産供給センター（代表川崎仁氏）が組織され、考える会と不測不離の緊密な関係を維持しつつ、毎日四台の小型トラックを走らせている。具体的な農産品を目の前にして、私たちの生きる時代と生活を考えてみようというわけである。

最初に述べたように、工業は消耗型資源に依存するが故に、先に希望をつなげない。しかし、農業はそのあり方次第では循環的であり、永続性がある。ところが、現代の農業は工業に従属し、石油がなければ成り立たぬ状態になってしまっている。工業化社会の没落ととも沈む。この没落と使い捨ての時代の流れとの不可分の関係に注目するのである。